

一瞬の波がしら

の、しづきに、如かず

かすかな光でいい
翳りかけたその胸もとつかのまの
キラめきを
とどめてみたい

……いま
どのような……ことばを、かけても
どこがちがうそれだけでない……
という気が……する

それならむしろ
さりげなく手渡す方がいい
冷たく透明だけれども
こころに彩られるというオブジェを

海ぞいにひらけた古都
戦と天災の記憶は歴史的な雑踏で踏み固められている
そんな地層に露出する
未完の勾玉なのか

古ぼけた駅の雑踏の中
静ころろなくうつむきたたずみきみを待った

夕陽の照り返しさざめく汀を、たあいのないことばをときどき交わしそぞろに、歩きつづける。
「その時に」似つかわしい、ひきしおどきの潮騒はまだ、そこにはなかった。

潮止まりのやわらかな波おとだけが、ふたりにこのこされた時間をカウントダウンしている。
単調なりフレインは脳裏にうねる三角波を打ち鎮め、上澄みをしだいに増していく。

この予約された刻の渚に
深い相模湾の底からうちよせる
ウルトラマリンドブルーの静謐

もはやことばにはならない
その意味の深さだけ沈んでいる
行方不明になってしまった心は

きみと出会ってぼくは

月の光に生きる生き物の潮騒を皮膚で感じるようになった
満ち引きのリズムに弄され相寄り離れまみゆる波間のゆらぎ

ながれみ
流身なれば

白泡にもまれ

ありそ
荒磯に擦れ

砂泥に埋もれ

嵐をやり過ごす

しかない

夜光虫

ぼくたちはなぜ勘合することのない貝合わせに興じ、
互いの古傷に粗塩を擦りつけあつてきたのだろう。
きみと過ごす夜は、眠りが飛び石となつてとぎれ果て、
はざまに襲い来る夢魔の中でいつも金縛りに身をよじる。

まどろみに落ちる一歩手前にかいま見る、鳥瞰のスカイダイビング。
尾てい骨から脳髓に突き抜けるこの冷たい引力から逃れることはもうたくさん。
チキン・レースへの誘いにぼくは、むしろ、
引力以上の加速度でその暗い落下に飛びこんでいく。

どんな生活の時間でもない
はだ寒いうたた寝のめざめまぎわに
不意に訪れる

モノトーンの苦い夢のあとひき

この昏い風景をくぐり抜けた後は

めざめ悪い怠惰な指さきがポケットのタバコをさぐりだす、その
間際に！

子どものぬり絵のようにむじやきな彩色を
すばやく
施してしまわねば
いけない

夢の中ではいつも
ひとの表情が分からない、なぜ
目の前の顔さえおぼろなうす闇に、こうして
佇まねばならないのだ

きみの目の色が分からない、なぜ

たぶん

潮の色も

血潮の色も

区別がつかない

こころの色弱なのだろう

色のついた夢を見たい！

たとえば熱帯の異国をさまよい

灼熱の路上に座り込み

通行人にすがり生きようとする

頼みの言葉とひきかえにでも

遠い潮騒が孕む豊かな沈黙暮れゆく時刻に
光はどこからくるのか、きみの横顔は
すでに影絵のように
ほの暗い

きみの嗚咽を打ち消してくれる

砕け散る波の音はないのだけれど

うす闇がきみをつつんで

その涙は誰にも見えないはずだ

もうすぐ潮が変わる

水底のざわめきが足の皮膚に伝わってくる

みなそこ

今こそ
ガラスの涙をその胸に
ほんのひとときの
残照を受けとめさせよう
その透明なオブリジェの意味を……
どう解釈してくれてもいい

たとえば
細い銀の鎖を引きちぎり、薄暮の波間に投げ捨ててもかまわない。
その行方に背を向けて、決然と立ち去ればいい。
微笑んで別れることなど
けっしてできないのだから

あるいは、
そのまま立ち尽くして、いつまでも泣いていてもいい。
三歩先で立ち止まっているほくの背中へ、あるいは拒否的に見えるだろうか？
それでも、誤解をしてくれた方がよいこと
ときにはあるのだと

さらには
不意に、ほの暗い沖にむかつて歩き出しても引き止めはしない。
ほどなく、きみとほくの区別も無く、きみとほくとの記憶すらも無くなるはず。
どんな命も、一瞬の波頭のしぶき
その一つにすぎない

それで、もしきみが、
この
ガラスの涙を細い指先でつまみ、目の前に
かざして妖しく微笑むならば
ぼくは……
その手を包み
うす闇の渚を
歩いて行こう
共倒れ、する
そのときまで

ことばを捨てて生きる日々であっても
流身であることはもう終わりにしたい